介護老人福祉施設における認知症ケア指針と質向上モデルの構築

原　祥子（はら　さちこ）
島根大学医学部看護学科地域看護学講座 教授

【ポスター -1】

現在、介護老人福祉施設（いわゆる特養）の入所者のほとんどに認知症があって、しかも重症な方が7割以上という状況です。

特養での認知症ケアは、現在では、個々のケアスタッフの経験に準じた試行錯誤が一生懸命重ねられているという実情であり、認知症ケアの質を確保する指針はまだ未開発です。

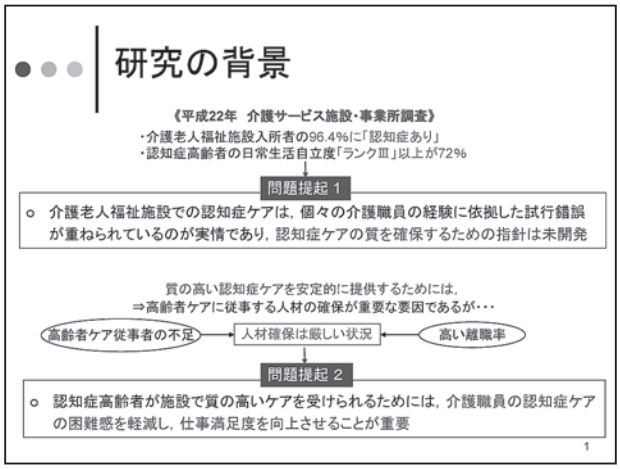
一方、質の高い認知症ケアを安定的に提供するためには人材確保が非常に重要なのですが、ケア従事者が不足あるいは高い離職率ということからも、人材確保は現在厳しい状況です。そこで、認知症高齢者が質の高いケアを受けられるためには、ケアスタッフのケアの困難感を軽減し、仕事満足度を向上させることが重要であると言えます。

【ポスター -2】

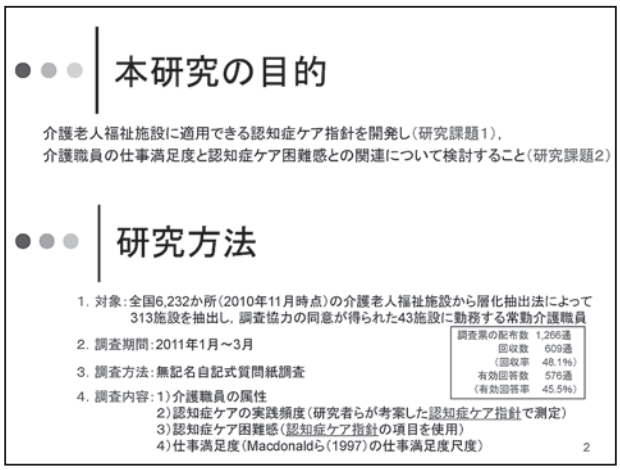
本研究の目的は、まず、特養に適用できる認知症ケアの指針を開発することが一つです。もう一つはケアスタッフの仕事満足度とケア困難感との関連について検討しようということでした。

研究方法は、全国6千数カ所の特養の中から313施設を層化抽出して、研究協力が得られた43施設のケアスタッフにアンケート調査を実施しました。アンケート内容は、私たちが考案した認知症ケア指針を用いて、そのケアの実践頻度、それから同じ項目を用いて、そのケアを実施することの困難感、そして仕事満足度を尋ねています。

ポスター１



ポスター２

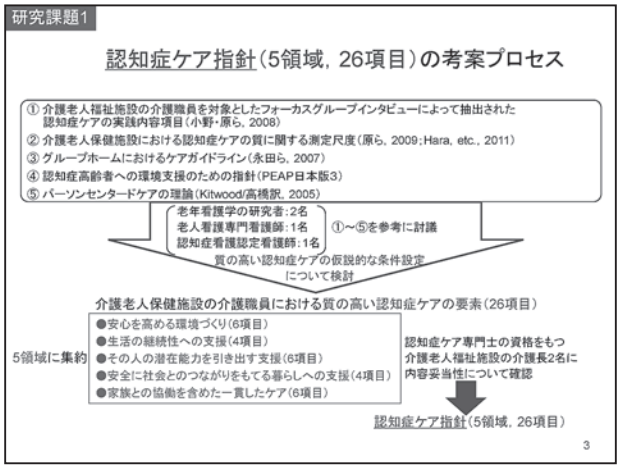


【ポスター -3】

まず、研究課題1のケア指針の考案プロセスです。

私どもが行ってきた先行研究の結果とか、特養ではないのですが老健やグループホーム等で開発されつつあるケアガイドライン等を参考にして、老年看護学の研究者や老人看護の専門看護師、あるいは認知症看護の認定看護師等で議論をして、「質の高い認知症ケアとは一体どういうものか」ということの仮説的な条件設定について検討をしました。

ポスター 3



そのプロセスを経て、特養におけるケアスタッフの質の高い認知症ケアの要素を26項目抽出し、さらにそれを類似性に沿って5領域に集約しました。この5領域26項目については、認知症ケア専門士等の資格を持つ特養の介護長2名の方に内容妥当性について確認をいただきました。

このようにして認知症ケア指針5領域・26項目を考案しました。

【ポスター -4】

まず、そのケア指針の開発についての結果です。

ポスターにケア指針26項目を用いた実践頻度に関する回答傾向を示しています。実施している頻度が高いものやそうでないものと、色々ばらつきはあります。例えばプライバシーに配慮してケアを行うとか、その人がいつもの場所を確保し、いつも通りに過ごせる居場所を作るといったようなケアは、よく行っているという結果が出ていました。

ポスター 4

【ポスター -5】

この26項目について構成概念妥当性を構造方程式モデリングで検討しました。5領域を一次因子、質の高い認知症ケアを二次因子としたモデルを設定して分析した結果、CFIが0.881で若干低いですけれども、RMSEAが0.057ですので、このモデルは許容できる範囲だろうと判断しました。

それから信頼性の検討ですが、Cronbachのαについては、26項目全体で0.91、5領域そ

れぞれについては0.64から0.79でした。各項目のCITCは、低いもので0.35ですが、0.65までの範囲に位置して、概ね妥当と判断しました。

【ポスター -6】

もう一つの方法で構成概念の妥当性を検討しました。Mayeroffのケアの互酬性の理論を踏まえて、「ケアを十分にしているということは、業務の充実感を高める」という理論に基づいて、今回は外的基準に仕事満足度を置き、そして質の高い認知症ケアを実践している人が仕事満足度を感じているかどうかというモデルを設定しました。

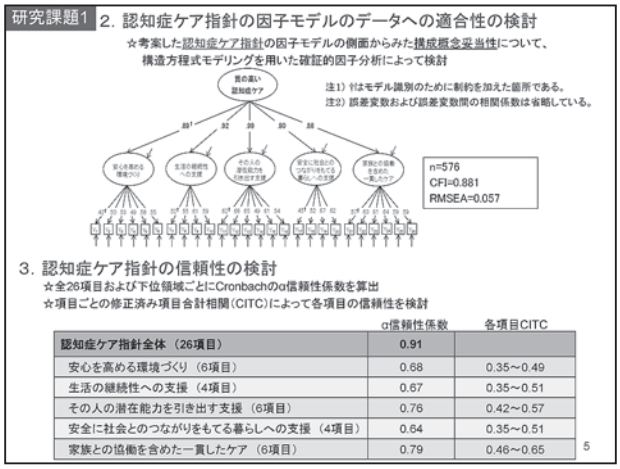
それを解析した結果、CFIは0.862、RMSEAが0.048で、概ね許容範囲だろうと考えました。質の高い認知症ケアから仕事満足度に向かうパス係数は0.26で、有意な正の関連性がありました。つまりこの26項目・5領域のケアを実践していると自己評価しているケアスタッフほど、仕事満足度が高いという結果でした。統制変数等については後で見ていただけたら、と思いますが、年齢の若いケアスタッフほど、このケアを実践しているという結果も出ています。

【ポスター -7】

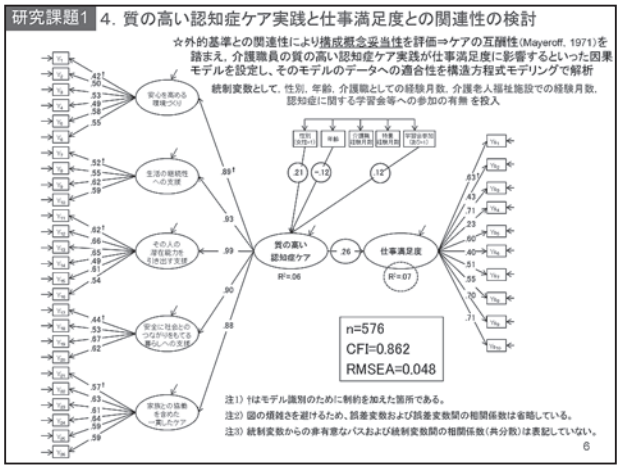
研究課題2に移ります。困難感と仕事満足度の関連についてです。

まず、困難感について、同じ26項目を用いて、「それぞれのケアを行うことがどれだけ困難ですか」という質問でしたが、例えば「非常に大変である」と答えられた中の一つには、昔の暮らしの情景や懐かしい雰囲気を入居者とともに作りだし、馴染みのある時代や文化を反映した環境作りをするといったケアについては、なかなか実践が難しい、困難感がある、という結果も

ポスター 5



ポスター 6



ポスター 7

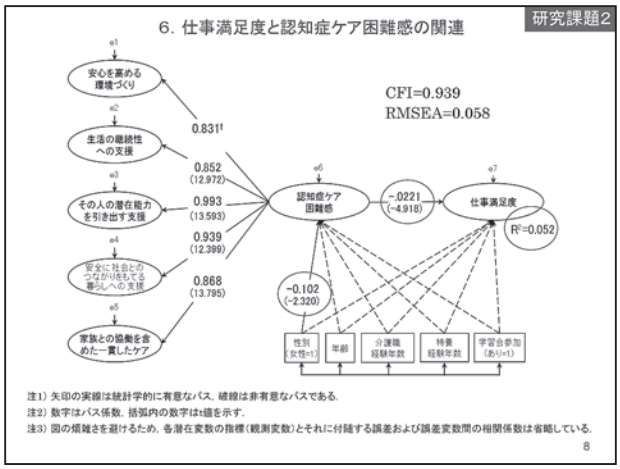
出ていました。

【ポスター -8】

仕事満足度と困難感との関連です。

5領域・26項目の質問について、認知症ケア困難感と仕事満足度の関連についての構造方程式モデリングを用いた解析です。CFIは0.939、RMSEAが0.058で、許容範囲でした。パス係数については有意な負の関連性がありましたので、認知症ケア困難感が低いほど仕事満足度は高いという結果でした。

ポスター 8



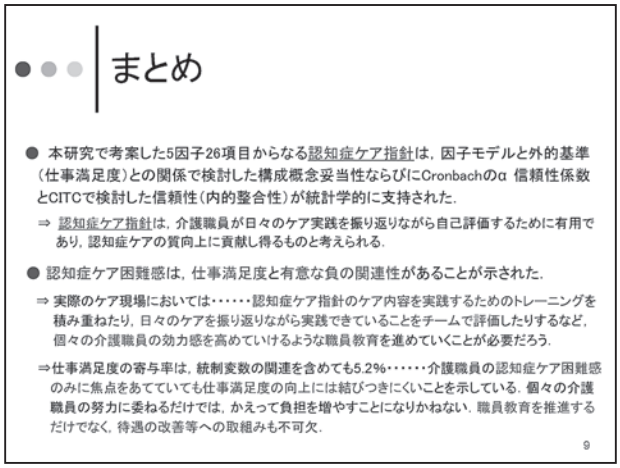
【ポスター -9】

まとめです。

構成概念妥当性と信頼性の検討の結果、この26項目の認知症ケア指針は、日々のケアを振り返るために有効に活用できるのではないかと考えました。

仕事満足度と困難感が関連しているということはありましたが、この仕事満足度の寄与率が5%であり、寄与する確率はそんなに高くないということでしたので、困難感のみに焦点を当てていては、なかなか仕事満足度を上げるのは難しいと考えます。やはり待遇の改善等の取り組みも不可欠だろうと思っています。

ポスター 9



質疑応答

会場： この認知症ケア指針は介護老人福祉施設ということで開発されたと思いますが、他のグループホームとか、色々なところで活用することは可能とお考えですか。比較などができたら面白いなと思ったのですが。

原： 適用の可能性はあるのではないかと思います。今回は、例えばパーソンセンタードケアの理論とか、PEAP日本版3といった認知症の人への環境支援の指針というものを参考にして26項目を抽出しました。認知症ケアの「これだけは外せないだろう」という基本的なケアを抽出したつもりでいますので、グループホーム等でも適用していき、検討していければいいかなと思っております。